家族システム内のコミュニケーションと家族構成員の主観的幸福感
－家族形態及び地域別検討

赤　澤　淳　子　・　水　上　喜美子　・　小　林　大　祐

本研究では，家族成員間の相互作用として家族との直接的かつ質的コミュニケーションを取り上げ，その実態について家族システム論に依拠して検討することを第一の目的とした．また，第二の目的として，個人が認知する家族とのコミュニケーションと，個人の主観的幸福感との関係について検討した．その分析に際しては，家族形態及び地域という視点を導入した．調査対象者は，子世代については，15歳から30歳までの666名であった．母親世代は，35歳から60歳までの645名を，また，祖母世代は，55歳から85歳までの306名を対象とした．分析の結果，子世代および母親世代が認知する家族のコミュニケーション態度については，特に父方祖母や母方祖母のコミュニケーションについて家族形態による差が顕著に見られることが明らかとなった．また，孫世代と祖母世代とのコミュニケーションに関しては地域差が見られ，家族成員間のコミュニケーションにおいて，家族形態や地域差が影響している可能性が示唆された．さらに，個人が認知する家族とのコミュニケーションと，個人の主観的幸福感との関係について検討した結果，親子関係のみならず，祖母－孫，姑－嫁という世代間の，相互作用のあり方が，個人の主観的幸福感に影響している可能性が示唆された．すなわち，日常のコミュニケーションは相互の関係性に影響するだけでなく，個々の精神的な健康度にも影響するものと推測された．

キーワード：家族システム，コミュニケーション，主観的幸福感，地域

【問題と目的】

家族は，関係性や歴史性を共有し，ひとまとまりの統合体として機能するという意味で，一つのシステムと見なすことが出来る（中釜，2008）．平木（1998）によれば，家族システム論とは，①家族の問題を成員の発達や親子・夫婦関係など世代的・歴史的視点から理解し，②家族の問題を家族が全体として影響を与え合う相互交流過程と見なし，③家族の問題を考える際に，家族のみならず家族を囲繞する社会を考慮に含める点に特徴がある．換言すると，家族理解には，家族をシステムとして捕捉し，その理解には個人（自己）だけではなく，家族成員間，世代，社会（地域）間の相互作用という視点が不可欠であることを提唱するものである．

本研究では，この家族システム論に依拠し，家族成員間の相互作用としてコミュニケーションを検討する．家族システムは単一組成的ではない．そこには，親子，夫婦，祖父母－孫といったサブシステムが存在する．これらのサブシステム内のコミュニケーションは，家族成員の関係性や心理的健康にいかなる影響を及ぼすのか．

まず，親子間については，４・５歳児の子をもつ核家庭における食事場面のビデオから，親子のコミュニケーションと子の情動との関係が分析されている（福田，2007）．その結果，ポジティブ情動が多く表出された幼児の家庭では，そうでない幼児の家庭より，応答必要性が高い幼児の発話に対し，家族が肯定的に応答することが多かった．また，同じく応答必要性が高い発話に対し，ポジティブ情動が多く表出された幼児の家庭では，そうでない幼児の家庭より，否定的に応答したり，希薄的な応答をすることが少なかったという．つまり，子の発話に対する家族の応答と，子の情動との間に関連があるのである．同様に，平井・岡本

（2001）は，小学校の高学年の児童を対象とした食事中のコミュニケーションと家族の健康性との関係を検討した結果，健康な家族においては，食事場面での親子のコミュニケーションの質と量が，子どもと親との心理的結合性を強化することを示唆している．中学生対象の調査でも，食事場面での家族との会話頻度が多いほど，精神的な健康状態が良好である旨判明している（小西・黒川，2001）．以上の食事場面の親子・家族間のコミュニケーション分析結果は，コミュニケーションの質と量が家族成員の精神的健康や家族間の信頼関係に影響することを示唆するものである．

また，眞榮城ら（2008）は，児童期から青年期における親子のコミュニケーションを相互作用という観点から検討した結果，母親が子どもに相談し，子どもから援助してもらう場面において，児童期の女子では，女子から母親への肯定的な援助と自己価値感との間に有意な正の相関を認めている．また，子が母親から援助してもらう場面においては，母親からの肯定的援助と青年期前期の男子の自己価値感との間に有意な正の相関が示された．そして，母親からの否定的援助と青年期中期の男子の自己価値感との間に有意な負の相関が示されている．以上の結果から，子どもの自己知覚の発達には，親子のコミュニケーションの質が影響しており，特に肯定的な相互作用が重要であることが明らかになった．また，言うまでもないが，コミュニケーションの影響は，親から子という一方通行的ではなく，子から親へと双方向的に影響している．

さらに，家族内のコミュニケーションに影響は，自他という二者関係だけでなく，他者同士のコミュニケーションから自己へという間接的な影響を示すことが明らかになった．野口・若島（2007）は，大学生を対象とし，両親間の関係と親子コミュニケーションとの関係を検討した結果，子どもが直接関与しない夫婦関係が，親子間のコミュニケーションに影響することを明らかにした．また，一方の親との率直なコミュニケーションが，他方の親との率直なコミュニケーションに影響するというように，父子間あるいは母子間の関係が他方の親との関わりに大きく影響していることも明らかになった．

つまり，親子間の良好なコミュニケーションは，子の年齢に関係なく，子の精神的健康度を高めること，またそのコミュニケーションの影響は当事者同士の二者関係に止まらず，他の家族成員にも影響を与えることが明らかになった．

次に，夫婦関係においても，夫婦間のコミュニケーションにおける満足度は，他の領域に比して，結婚満足度の重要な予測因であることが指摘されている（Jacobson & Moore，1981）．米国における，夫婦のコミュニケーションと夫婦関係満足度との関係の実証研究を概観した神原（1992）においても，結婚満足度におけるコミュニケーションの質と量の重要性が示唆されている．また，国内の研究においても，育児期の夫婦や老年期の夫婦を対象とし，夫婦の会話量の多寡と関係満足度との強い関連が明らかになっている（袖井，1984；小澤，1987；渡邉ら，2001）．さらに，コミュニケーションの質についても，双方が威圧的かつ回避的な態度でコミュニケーションしている夫婦においては，夫婦関係満足度が低く，関係満足度が高い夫婦においては，共感的かつ依存的なコミュニケーション態度が高いことが明らかになっている（平山・柏木，2004；赤澤・伊月・金井，2005）．以上の研究は，夫婦の関係性におけるコミュニケーションの重要性を立証している．また，上述したように夫婦関係の良好さは，親子関係にも影響を与えるという意味でも，夫婦間のコミュニケーションは，家族成員全体にとって大きな意味をもつといえよう．つまり，夫婦関係に影響するのは，単に夫と妻に関する変数だけではなく，その他の家族との相互作用や家族を取り巻く社会の要因も大きいと考えられる．このことをふまえて，夫婦間の問題を広げて，夫婦の親である親夫婦との関係，あるいは親夫婦（祖父母）と子（孫）との関係のあり方についても検討する必要性があろう．

以上の研究から，家族間で行われるコミュニケーションが，直接的にも，間接的にも家族成員の精神的健康度に影響を与えることが明らかになった．しかし，親子間や夫婦間のコミュニケーションに関する研究に比して，その他の家族成員間のコミュニケーションに関する研究は少ない．また，親子間のコミュニケーションにおいても，成人同士の親子についての研究は見あたらない．また，祖父母と孫とのコミュニケーショ

ンに関する研究も数少ない．祖父母と孫とのコミュニケーションについては，清水（1997）が高校生を対象として検討している．その結果，祖父母との同居の有無や，祖父母と親との関係の良否が，祖父母ー孫間のコミュニケーションに影響することが示唆されている．しかし，孫，母親，祖父母という世代間のコミュニケーションについての研究は見あたらない．

そこで，本研究では，まず，祖母，母親，子どもの三世代に注目し，各々が認知する家族との直接的かつ質的コミュニケーションの実態について検討することを第一の目的とする．具体的には，子が認知する母親，父方実母，母方実母とのコミュニケーション，母親が認知する子ども，姑，実母，夫とのコミュニケーション，祖母が認知する孫，嫁（母親）とのコミュニケーションについて検討する．その際，今回は特に相手からのコミュニケーション態度の認知について調査を実施し，分析を行う．コミュニケーションは双方向的であり，自己のコミュニケーションのあり様は，相手の態度からの影響も大きい．その意味では，双方向のコミュニケーションについて分析することが望ましいが，葛藤を抱えた夫婦では，パートナーの否定的な行動を過大視するなど，認知に歪みあることが明らかになっている（Gottman, 1993）．つまり，実際の配偶者からのコミュニケーション態度以上に，それを受ける側の認知の仕方が，自己のコミュニケーション態度に強く影響する可能性があると推測されるため，今回は自己が認知する相手のコミュニケーションに注目することとした．

また，今回の分析では，家族内のコミュニケーションについて，家族形態及び地域という視点を導入して分析する．家族形態については，上述したように特に祖父母とのコミュニケーションについて，同居の有無が影響を及ぼすことが明らかになっていることから，祖父母と同居する三世代家族と核家族との比較を行う．

一方，地域差については，従前の家族内コミュニケーション研究に導入されなかった視点であるが，今回は全国と福井県との比較を行う．福井県を対象地域として選択したのは，この地域が他県には類例のない特徴を有するからである(福井県総務部政策統計室，2007)．それは，①三世代同居率が高いこと（全国第２位），②女性の就業率が高く，共働き世帯の割合も58.2であり（全国第１位），③高齢者における平均寿命は長く（男女ともに全国２位），④地域交流が活発（県民の57.9％は地域の何らかの行事に参加）であり，世代別行事だけでなく，世代間交流がなされていることである．これらの４つの特性は，家族内のコミュニケーション，特に世代間のコミュニケーションに大きく影響するものと予測される．例えば，三世代同居率が高く，共働きが多いことから，孫の世話は祖父母の役割となることが多いため，祖父母と孫との関係性が密であることが，祖母と孫とのコミュニケーションにも影響を及ぼす可能性がある．

さらに，本研究では，家族構成員間のコミュニケーションの認知同士の関係，および，個人が認知する家族とのコミュニケーションと個人の主観的幸福感との関係についても併せて検討し，家族システムについて検証したい．

【方　法】

１．調査対象者

子世代は，15歳から30歳までの666名を対象とした．平均年齢は18.07歳であった．家族形態は，核家族が350名，三世代家族（父方同居）が316名であった．また，地域については，全国データ分（以下，「県外」とする）が335名で，福井県内が331名であった．全国データの地域の内訳は，北海道・東北47名（14％），関東107名（32％），東海・北陸・甲信越63名（18.8％），近畿53名（15.8％），中四国32名（9.6％），九州・沖縄33名（9.9％）であった．

母親世代は，35歳から60歳までの645名を対象とした．家族形態は，核家族が338名，三世代家族が307名であった．また，地域については，県外データが327名で，福井県内が318名であった．全国データの地域の内訳は，北海道・東北47名（14％），関東107名（32％），東海・北陸・甲信越63名(18.8％)，近畿53名(15.8％)，中四国32名（9.6％），九州・沖縄33名（9.9％）であった．

祖母世代は，55歳から85歳までの306名を対象とした．家族形態は，県外は父方同居のみで155名であった．

地域の内訳は，北海道・東北23名（14.8％），関東49名（31.6％），東海・北陸・甲信越30名（19.4％），近畿24名（15.5％），中四国17名（11％），九州・沖縄12名（7.7％）であった．県内は，父方同居が151名で，母方同居が34名であった．

２．調査時期

2009年３月～６月

３．調査内容

１）コミュニケーション態度

平山・柏木（2001）における夫婦間のコミュニケーション態度尺度の下位尺度「共感」,「依存・接近」(以下「依存」とする),「威圧」,「無視・回避」(以下「回避」とする）の中から因子負荷量と家族コミュニケーションにふさわしい項目を考慮して各３項目を使用した．子世代には,「母親」・「父方祖母」・「母方祖母」のコミュニケーション態度について，母親世代には,「子ども」・「夫」・「姑」・「実母」のコミュニケーション態度について，祖母世代には「孫」・「嫁」のコミュニケーション態度について評定を求めた．回答法は,「よくある（４点)」「たまにある（３点)」「殆どない（２点)」「全くない（１点)」の４件法である．得点化については，３項目ごとの合計得点を用いた．

２）主観的幸福感

Diener ら（1985）の Satisfaction with Life Scale（SWLS）を角野（1994）が翻訳し作成した日本語版 SWLS の５項目を用いた．

４．調査手続き

県外データについては，調査会社に委託し，調査票の配布及び回収を依頼した．配布数は，核家族200セット，三世代家族200セットであった．県内データについては，なるべく地域に偏りが出ないよう，各地域の役場，社会福祉協議会，及び大学等において配布を依頼し，郵送法にて返却してもらった．配布数は，核家族500セット，三世代家族500セットであった．

【結　果】

１．家族形態及び地域別に検討した家族のコミュニケーション態度

１）子世代が認知する家族のコミュニケーション態度

子世代が認知する,「母親」・「父方祖母」・「母方祖母」のコミュニケーション態度について，２（家族形態：核・三世代）×２（地域：県外・県内）の２要因の分散分析を行った（Table１）．その際，三世代家族については，父方同居のみを対象とした．なお，統計分析には SPSS を使用した．

Table １：家族形態および地域別にみた子世代が認知する家族の質的コミュニケーション

		核家族		三世代家族		*F* 値		
		県外	県内	県外	県内	家族形態	地域	交互作用
		(n＝171)	(n＝179)	(n＝164)	(n＝151)			
母親	共感	8.75(1.30)	8.74(1.29)	8.93(1.09)	8.86(1.20)	2.54	0.16	0.12
	依存	8.76(1.66)	8.79(1.78)	8.90(1.66)	8.78(1.63)	0.23	0.09	0.34
	威圧	6.82(2.16)	6.60(2.18)	6.85(2.28)	6.58(1.94)	0.00	2.19	0.02
	退避	6.99(1.98)	6.92(2.01)	6.92(2.03)	6.95(1.98)	0.02	0.02	0.12
		(n＝149)	(n＝126)	(n＝164)	(n＝151)			
父方祖母	共感	8.44(2.40)	8.35(2.37)	8.04(2.29)	8.33(2.20)	1.25	0.29	0.99
	依存	7.00(2.20)	7.51(2.28)	7.13(2.00)	7.73(2.18)	0.96	9.70**	0.07
	威圧	4.68(1.87)	4.68(1.96)	5.59(2.47)	5.85(2.15)	34.15***	0.54	0.56
	退避	5.05(2.03)	5.16(2.05)	6.11(2.53)	6.09(2.13)	29.08***	0.06	0.11
		(n＝156)	(n＝144)	(n＝145)	(n＝127)			
母方祖母	共感	9.28(1.84)	9.22(2.00)	8.90(2.03)	8.87(1.84)	5.18*	0.09	0.01
	依存	7.96(1.77)	8.01(1.91)	7.50(2.03)	7.83(1.71)	4.17*	1.49	0.87
	威圧	4.51(1.81)	4.60(1.80)	4.72(1.91)	4.70(1.63)	1.07	0.06	0.15
	退避	4.74(1.89)	4.75(1.95)	4.93(1.83)	4.80(1.56)	0.57	0.13	0.18

（　）内は標準偏差　　$^{*}p<.05$，$^{***}p<.001$

分析の結果，子世代が認知する母親のコミュニケーション態度については，家族形態や地域による差は認められなかった．子世代が認知する父方祖母のコミュニケーション態度については，「依存」について地域の有意な主効果が，また，「威圧」及び「回避」について家族形態の有意な主効果が示された．つまり，県内の子どもは，県外の子どもより，父方祖母の依存的コミュニケーションを高く認知していた．また，三世代家族の子どもは，核家族の子どもより，父方祖母の威圧的コミュニケーションや退避的コミュニケーションを高く認知していた．一方，子世代が認知する母方祖母のコミュニケーション態度については，「共感」及び「依存」で家族形態の有意な主効果が示された．つまり，核家族の子どもは，三世代家族の子どもより，母方祖母の共感的コミュニケーションや依存的コミュニケーションを高く認知していた．「威圧」及び「回避」については，有意差は示されなかった．

2）母親世代が認知する家族とのコミュニケーション

同様に，母親世代が認知する，「子ども」・「夫」・「姑」・「実母」のコミュニケーション態度について，2（家族形態）×2（地域）の2要因の分散分析を行った（Table 2）．

分析の結果，母親が認知する子どものコミュニケーション態度については，「共感」において有意な交互作用が示された．下位検定（*Bonferroni*）を行った結果，県外において，三世代家族の母親は核家族の母親より，子どもの共感的コミュニケーションを高く認知していた．また，「威圧」に関しては，家族形態において傾向差が見られ，三世代家族の母親は，核家族の母親より，子の威圧的コミュニケーションを高く認知する傾向にあった．さらに，「退避」では地域の有意な主効果が示され，県外の母親は県内の母親より，子の退避的コミュニケーションを高く評定していた．「依存」においては有意差は示されなかった．

次に，母親が認知する夫のコミュニケーション態度については，「退避」にのみ地域の有意な主効果が示された．つまり，県外の母親は県内の母親より，夫の退避的コミュニケーション態度を高く認知していた．「共感」，「依存」，「威圧」については有意差は示されなかった．

母親における「姑」のコミュニケーション態度の認知については，「依存」において有意な交互作用が示

Table 2：家族形態および地域別にみた母親世代が認知する家族のコミュニケーション

		核家族		三世代家族		*F* 値		
		県外	県内	県外	県内	家族形態	地域	交互作用
		(n＝170)	(n＝167)	(n＝156)	(n＝148)			
子ども	共感	9.05(1.44)	9.40(1.64)	9.49(1.43)	9.33(1.52)	2.32	0.60	4.60*
	依存	9.91(1.30)	10.04(1.39)	10.12(1.31)	10.05(1.40)	0.96	0.08	0.86
	威圧	6.11(1.93)	6.40(1.96)	6.58(1.83)	6.49(1.97)	3.39＋	0.39	1.58
	退避	7.72(1.78)	7.51(1.91)	7.73(1.67)	7.34(1.86)	0.31	4.43*	0.37
		(n＝171)	(n＝164)	(n＝155)	(n＝150)			
夫	共感	8.84(1.93)	8.97(2.17)	9.06(1.89)	9.14(1.88)	1.55	0.46	0.02
	依存	8.67(1.82)	8.57(1.95)	8.85(1.69)	8.80(1.70)	2.10	0.28	0.04
	威圧	7.14(2.29)	7.41(2.48)	7.50(2.36)	7.15(2.24)	0.08	0.04	2.70
	退避	8.54(1.92)	7.98(2.28)	8.28(1.90)	7.82(1.92)	1.82	10.25**	0.10
		(n＝148)	(n＝115)	(n＝156)	(n＝145)			
姑	共感	8.08(2.30)	8.33(2.08)	8.38(2.06)	8.11(2.05)	0.00	0.02	1.50
	依存	6.87(2.00)	7.28(2.00)	7.87(1.88)	7.60(1.94)	15.60***	0.18	4.08*
	威圧	5.46(2.08)	5.68(2.20)	6.56(2.37)	6.68(2.24)	30.80***	0.82	0.06
	退避	6.29(2.07)	6.41(2.19)	7.30(2.21)	6.98(2.17)	18.37***	0.30	1.44
		(n＝155)	(n＝141)	(n＝141)	(n＝127)			
実母	共感	9.62(1.79)	9.84(1.64)	10.24(1.39)	10.02(1.61)	8.84**	0.00	2.55
	依存	8.87(1.71)	9.12(1.64)	9.54(1.41)	9.23(1.44)	8.70**	0.05	4.27*
	威圧	5.65(1.95)	5.90(2.14)	5.57(1.77)	5.57(1.79)	1.55	0.58	0.66
	退避	6.42(1.92)	6.36(1.96)	6.28(1.93)	6.07(1.85)	1.73	0.67	0.21

（　）内は標準偏差　　$+p<.10$，$^{*}p<.05$，$^{**}p<.01$，$^{***}p<.001$

された．下位検定（*Bonferroni*）の結果，県外において，三世代家族の母親は核家族の母親より，姑の依存的コミュニケーションを高く認知していた．「威圧」及び「退避」では，家族形態において有意な主効果が見られ，両者とも三世代家族の母親の認知が，核家族の母親の認知より高かった．「共感」においては，有意な主効果は示されなかった．

一方，実母のコミュニケーション態度については，「共感」において家族形態の有意な主効果が示された．三世代家族の母親は，核家族の母親より，実母の共感的コミュニケーションを高く認知していた．また,「依存」では有意な交互作用が示され，県外において，三世代家族の母親は核家族の母親より，実母の依存的コミュニケーションを高く認知していた．「威圧」及び「退避」では，有意差は示されなかった．

３）祖母が認知する家族とのコミュニケーション態度

祖母データについては，三世代家族のみであるため，「孫」・「嫁」のコミュニケーション態度について地域差を検討した（Table ３）．

祖母が認知する孫のコミュニケーションについて，県外と県内との平均値の差の検定を行った結果，「依存」についてのみ有意差が示さた．県内の祖母は，県外の祖母より，孫の依存的コミュニケーションを高く認知していた．その他のコミュニケーション態度については，有意差は見られなかった．また，嫁のコミュニケーション態度については，全てで有意差は示されなかった．

Table３：地域別にみた祖母世代が認知した家族のコミュニケーション

		県外（n＝146）	県内（n＝132）	*t* 値
孫	共感	9.04(1.98)	9.40(1.89)	1.55
	依存	8.10(1.99)	8.74(1.96)	2.72**
	威圧	6.05(2.26)	6.09(2.02)	0.14
	退避	7.03(1.85)	6.80(1.96)	0.98
嫁	共感	9.66(1.88)	9.61(1.84)	0.85
	依存	8.84(1.83)	8.94(2.07)	0.68
	威圧	5.82(2.09)	5.83(2.08)	0.96
	退避	6.55(2.15)	6.64(2.02)	0.70

（　）内は標準偏差　　$^{**}p<.01$

２．家族内コミュニケーション間の関係

「共感」及び「依存」をポジティブコミュニケーション（PC）とし，「威圧」及び「退避」をネガティブコミュニケーション（NC）として，「父方祖母（姑)」,「母親（嫁)」,「子ども（孫)」間の相関を家族形態別・地域別に検討した（Table 4, 5）．

まず，核家族においては，県外と県内に共通して，子どもが認知する母親のコミュニケーション態度と，母親が認知する子どものコミュニケーション態度との間には，有意な正の相関が示されている．つまり，子どもが母親のコミュニケーション態度を肯定的に評価していると，母親の方も子どものコミュニケーション態度を肯定的に評価しているということになる．

また，地域を問わず，核家族の母親が認知する姑のコミュニケーションと，子ども（孫）が認知する父方祖母のコミュニケーションとの間に有意な正の相関が示されていた．つまり，母親が姑のコミュニケーション態度を肯定的に認知していると，子どもも父方祖母のコミュニケーション態度を肯定的に認知していることが明らかになった．そして，県内の核家族においてのみ，子の認知する母親のポジティブなコミュニケーションと，母親が認知する姑のポジティブなコミュニケーションの認知間において，有意な正の相関が示されていた．

次に，三世代家族の結果をみると，核家族と同様に，県外と県内に共通して，子どもと母親，父方祖母と孫との間のポジティブなコミュニケーションの認知間に，有意な正の相関が示されており，相互の認知が一致していた．つまり，一方が相手のコミュニケーションをポジティブであると感じれば，他方も同様に感じているのである．県外の三世代家族においては，母親と姑との間のコミュニケーションの認知も一致する．また，県外の三世代家族では，同一の人物からのコミュニケーションについて，異なる人物が評定した結果間の相関が高い．例えば，母の認知する子どものポジティブなコミュニケーションと，祖母が認知する子ども（孫）のポジティブなコミュニケーションとの間には，有意な正の相関が見られる．しかし，県内の三世代家族では，有意な相関が必ずしも見られない場合もあり，認知にずれがあることが示唆された．

Table 4：核家族における家族内コミュニケーション間の相関

	＜子どもの認知＞				＜母親の認知＞			
	①母親Ｐ	②母親ｎ	③父方祖母Ｐ	④父方祖母ｎ	⑤子どもＰ	⑥子どもｎ	⑦姑Ｐ	⑧姑ｎ
＜県外＞↓　＜県内＞→								
①母親Ｐ		-.287*	.350**	.083	.496**	-.450***	.401***	-.082
②母親ｎ	-.448***		-.102	.248*	-.053	.522**	-.058	.431***
③父方祖母Ｐ	.079	-.102		-.223＋	.186	-.228＋	.494***	-.318**
④父方祖母ｎ	-.066	.183*	-.196*		.046	.089	-.199＋	.406***
⑤子どもＰ	.469***	-.293**	.174＋	-.101		-.450*	.145	.080
⑥子どもｎ	-.336***	.430***	.115	.115	-.330***		-.184	.244*
⑦姑Ｐ	.099	-.161	.358***	-.185*	.346***	-.088		-.426***
⑧姑ｎ	-.089	.299**	-.190*	.390***	-.135	.172	-.469***	

県外ｎ＝127，　県内ｎ＝84　　＋p＜.10，*p＜.05，**p＜.01，***p＜.001

Table 5：核家族における家族内コミュニケーション間の相関

	＜子どもの認知＞				＜母親の認知＞				＜祖母の認知＞			
	①母親Ｐ	②母親Ｎ	③父方祖母Ｐ	④父方祖母Ｎ	⑤子どもＰ	⑥子どもＮ	⑦姑Ｐ	⑧姑Ｎ	⑨孫Ｐ	⑩孫Ｎ	⑪嫁Ｐ	⑫嫁Ｎ
＜県外＞↓　＜県内＞→												
①母親Ｐ		-.324**	224＋	-.077	.234*	-.177	.150	-.003	.142	.093	.240*	-.168
②母親Ｎ	-.180*		-.033	.203＋	-.023	.372**	.107	-.047	-.086	-.008	-.140	.074
③父方祖母Ｐ	.185*	.021		-.486***	.066	.002	.421***	-.453**	.267*	-.095	.089	-.110
④父方祖母Ｎ	.122	.362***	-.220*		.023	.022	-.145	.181	-.003	.119	.004	.071
⑤子どもＰ	.374***	.009	.072	.054		-.315**	.374**	.011	-.026	-.130	.018	.028
⑥子どもＮ	-.204***	.523***	.011	.198	-.260**		-.224＋	.345**	-.150	.322**	-.173	.319**
⑦姑Ｐ	.062	-.011	.475***	-.223*	.165＋	.064		-.616***	.044	-.122	.172	-.046
⑧姑Ｎ	.230*	.312***	-.241**	.518***	.092	.233**	-.507***		-.170	.164	-.221＋	.261*
⑨孫Ｐ	.168＋	.022	.542***	-.188*	.179*	-.048	.507***	-.265**		-.211＋	.531***	-.268*
⑩孫Ｎ	-.020	.330***	-.052	.388***	-.035	.314***	-.131	.302**	-.253**		-.208＋	.532***
⑪嫁Ｐ	.287**	-.034	.300**	-.087	.227*	-.038	.570***	-.229*	.579***	-.067		-.386**
⑫嫁Ｎ	-.037	.365***	.037	.228*	.033	.245**	-.163＋	.308**	-.111	.438***	-.403***	

県外ｎ＝124，　県内ｎ＝77　　＋p＜.10，*p＜.05，**p＜.01，***p＜.001

３．家族成員間のコミュニケーションと主観的幸福感との関係

子ども世代，母親世代，祖母世代が各々認知する家族のコミュニケーションと，各自の主観的幸福感との相関を家族形態別・地域別に検討した(Table 6，7，8)．

まず，子世代が認知する家族のコミュニケーション態度と主観的幸福感については，家族形態や地域を問わず，母親の「共感」や「依存」と，子の主観的幸福感との間に，有意な正の相関が示されていた．母親の「威圧」と子の主観的幸福感との間には，県外の三世代家族の子ども以外では，有意な負の相関が示された．三世代家族の子どもにおいては，母親の「退避」と主観的幸福感との間に負の相関が見られた．また，県内の子どもでは，父方祖母の「共感」や「依存」と主観的幸福感との間に，正の相関が見られた．そして，三世代家族の子どもでは，母方祖母の「共感」や「依存」と主観的幸福感との間に正の相関が示された．

Table 6：子世代が認知するコミュニケーションと主観的幸福感との相関

		＜子の主観的幸福感＞			
		核家族		三世代家族	
		県外 (ｎ＝129)	県内 (ｎ＝103)	県外 (ｎ＝140)	県内 (ｎ＝116)
母親	共感	.230**	.371***	.282**	.335***
	依存	.345***	.506***	.278**	.466***
	威圧	-.207*	-.237*	-.148＋	-.368***
	退避	-.109	-.194＋	-.194*	-.407***
父方祖母	共感	.054	.304**	.153＋	.245**
	依存	.016	.378***	.253**	.285**
	威圧	-.063	.062	-.067	-.175＋
	退避	.005	.038	-.113	-.056
母方祖母	共感	.149＋	.176＋	.369***	.358***
	依存	.098	.309**	.293**	.348***
	威圧	.043	.088	.000	-.045
	退避	-.051	.141	-.085	-.014

*p＜.05，**p＜.01，***p＜.001

次に，母親世代の認知する家族のコミュニケーションと主観的幸福感については，県内の核家族の母親以外で，子の「共感」と主観的幸福感との間に正の相関が見られた．県外の核家族の母親においては，その他の母親より，子のコミュニケーション態度と主観的幸福感との間に関連が多く示されている．また，家族形態や地域を問わず，夫の「共感」や「依存」と母親の主観的幸福感との間に，有意な正の相関が示されている．そして，県内の核家族の母親以外では，夫の「退避」，姑の「威圧」及び「退避」と主観的幸福感との間には負の相関が示されている．さらに，県外の核家族と県内の三世代家族の母親では，実母の「共感」及び「依存」と主観的幸福感との間に正の相関が見られた．

Table７：母親世代が認知するコミュニケーションと主観的幸福感との相関

		＜母親の主観的幸福感＞			
		核家族		三世代家族	
		県外 (n＝129)	県内 (n＝87)	県外 (n＝137)	県内 (n＝108)
子ども	共感	.187*	.111	.182*	.197*
	依存	.224*	.068	.112	-.042
	威圧	-.157	-.023	-.033	-.122
	退避	-.254**	-.068	-.085	-.169＋
夫	共感	.385***	.298**	.423***	.369***
	依存	.374***	.370***	.305***	.230*
	威圧	-.475***	-.180	-.278**	-.420***
	退避	-.370***	-.177	-.229*	-.333***
姑	共感	.201*	.119	.201*	.317**
	依存	.341***	.135	.227**	.281**
	威圧	-.154	-.071	-.090	-.264**
	退避	-.225*	-.130	-.156	-.205*
実母	共感	.253**	.201＋	-.040	.317**
	依存	.245**	.196＋	.034	.355***
	威圧	-.112	-.014	-.046	-.112
	退避	-.204*	-.018	.085	-.005

＋p＜.10，*p＜.05，**p＜.01，***p＜.001

さらに，祖母世代の認知する家族のコミュニケーションと主観的幸福感については，地域を問わず，孫や嫁の「共感」及び「依存」と主観的幸福感との間に，有意な正の相関が示された．そして，県内の祖母については，孫の「退避」と主観的幸福感との間に，県外の祖母においては，嫁の「威圧」と主観的幸福感との間に，有意な負の相関が示された．

Table８：祖母世代が認知するコミュニケーションと主観的幸福感との相関

		＜祖母の主観的幸福感＞	
		県外 (n＝137)	県内 (n＝110)
孫	共感	.310***	.338***
	依存	.296***	.342***
	威圧	-.159＋	-.102
	退避	-.142＋	-.209*
嫁	共感	.305***	.219*
	依存	.291**	.222*
	威圧	-.169*	-.062
	退避	-.165＋	-.092

*p＜.05，**p＜.01，***p＜.001

【考　察】

１．家族形態及び地域別に検討した家族のコミュニケーション態度

まず，子世代が認知する家族のコミュニケーション態度については，家族形態による差異が，地域による差異より顕著に示された．父方祖母が同居する三世代家族の子どもでは，核家族の子どもより，祖母とのコミュニケーションにおいて，ネガティブな面を感じることが多い．この結果は，高校生を対象とした，祖父母・孫コミュニケーションの研究（清水，1997）とも一致する．清水の調査でも，祖父母の「嫌いなところ」を具体的に答えた生徒は，祖父母と同居するものに多いという結果が得られている．また，同調査の高校生の孫達は，祖父母に対して，概して良いイメージを抱いていたが，どちらといえば，別居の祖父母には，より暖かく優しいイメージを抱き，同居の祖父母に対しては，頑固で口うるさく，せかせかしたイメージを持っていることが報告されている．今回の結果から，同居により，当然ながら良い面ばかりでなく，ネガティブな面が強調されることがあるといえる．

一方，本調査では，同居していない母方祖母のコミュニケーションに関しては，むしろ核家族の子どもの方が，三世代家族の子どもより，ポジティブな面を強く感じていることが明らかになった．これも先行研究と一致している．先の清水の調査において，父方祖父母と母方祖父母を比較すると，全体として後者は前者より良いイメージで見られていたことが報告されてい

る．つまり，同居していない場合には，孫は母方の祖父母に対して，より良いイメージを持つ．これについては，祖父母世代と親世代との関係が影響していると推測される．祖父母と同居していない核家族の子どもにとって，祖父母との交流や祖父母のイメージは，親と祖父母との交流の程度や，親が祖父母についてどのように子どもに伝えているかという，間接的な影響を受けやすいと考えられる．子どもが持つ父親の存在感に影響を与える要因として，母の語りが指摘されている（佐藤・佐々木，2007）．佐藤らによると母親が父親を肯定していると捉える児童は，否定していると捉える児童よりも父親に対して良いイメージを形成しているということである．つまり，今回の結果においても，子どもの身近にいる母親の祖父母についての語りが，子どもに影響している可能性が伺われる．

子世代が認知する家族のコミュニケーション態度において，唯一地域差が示されたのは，父方祖母の依存的コミュニケーション態度であった．つまり，県内では，県外より，孫と父方祖母との交流が密である可能性が示唆されたが，これは県内の祖母の育児への関与度が影響したものと推測される．今後，それらの変数も加え検討し，さらに実証する必要性があろう．

次に，母親世代が認知する家族のコミュニケーション態度においても，地域差より家族形態による差異の方が多く示された．まず，子世代と同様に，三世代家族の母親は，核家族の母親より，姑のネガティブなコミュニケーション態度の認知度が高い．やはり，同居により，ネガティブな面にも接する機会が多くなるものと予測される．志賀（2004）によると，直系家族を形成する人数が多かった時代には，嫁ー姑あるいは小姑などとの関係で，主に新参者であった嫁に負担がかかることが多かったが，現在では新参者に関する葛藤は目立たなくなったとある．しかし，現代においても，三世代家族の嫁は，核家族の嫁以上に，姑の自分に対するコミュニケーションについて，威圧的あるいは退避的な側面を感じていることがわかった．一方，実母のコミュニケーション態度については，母親世代の認識は，子世代とは異なり，三世代家族の母親の方が，共感的なコミュニケーション態度の認知度が高い．つまり，三世代家族の母親世代は，夫の両親との同居の如何を問わず，非同居の実母の共感的態度を，核家族の母親以上に強く認知しているのである．このような差異は，姑と実母との対比により示された可能性も高い．

母親世代が認知する家族のコミュニケーション態度で，地域差があるのは，子ども及び夫の退避的コミュニケーション態度であった．両者とも，県外の母親の方が，子どもや夫をより退避的と認知していた．先の子世代の結果とも併せると，県内の家族は，県外より，より家族間の交流が行われている可能性が高い．

また，母親世代で特徴的なのは，県外における核家族と三世代家族との間に，顕著な差が示されているところである．子どもの共感的コミュニケーション態度，姑の依存的コミュニケーション態度，及び実母の依存的コミュニケーション態度のいずれにおいても，県外における三世代家族の母親の認知度は，核家族の母親より高い．つまり，県外の核家族の母親においては，姑や実母という親世代との交流が少ない可能性が伺われる．これには，物理的な距離などが，関連している可能性もあるので，今後さらに検討することとしたい．

最後に，県内の祖母は県外の祖母より，孫の依存的コミュニケーション態度の認知度が高くなっていた．先の子世代の結果と合わせて考えると，父方祖母と孫は，相互に依存かつ接近的なコミュニケーションをとっていることがわかる．このような交流は，県内においては，父方祖母が孫育てに大きく貢献していることと関連している可能性が高い．

2．家族内コミュニケーション間の関係

家族内のコミュニケーション間の関係では，ほぼ地域や家族形態に関係なく，自己が認知する相手のコミュニケーションのあり様と，相手が認知する自己のコミュニケーションのあり様とが好対照をなす．すなわち，コミュニケーションは双方向的で，自己のコミュニケーションのあり様は，相手の態度からの影響を受け，またその逆もある．この結果は，今回のデータの信頼性を示しているといえよう．また，母が認知する子どものコミュニケーション態度は，祖母が認知する子ども（孫）のコミュニケーション態度とほぼ一致するというように，一人の家族成員は，その他の家族に

同じようなコミュニケーション態度をとっていることが示された．しかし，この傾向については，県内の三世代家族においては，他ほど顕著ではない．そして，祖母が認知する子ども（孫）のポジティブなコミュニケーションと，母が認知する子どものポジティブなコミュニケーションとの間には，むしろずれがある．つまり，子どもは母親と祖父母には，異なる対応をすることが推測される．

３．家族成員間のコミュニケーションと主観的幸福感との関係

まず，子どもとの主観的幸福感の高さは，地域や家族形態を問わず，母親からのコミュニケーションの質と関連することが明らかになった．本研究の対象となる子世代は青年期であり，親からの心理的離乳の時期とも言える．親からの独立を希求しつつも，依存と自立の間を揺れ動く青年期は，最も身近な存在である母親の言動の影響を大きく受けるようだ．

また，県外の核家族を除くと，子世代の主観的幸福感の高さは，祖母の肯定的コミュニケーションの高さと関連していた．志賀（2004）は，思春期は対他的存在としての自己を意識し始める時期であり，親よりも一世代離れた祖父母との方が「間」を持ちやすいと感じる可能性を指摘している．本研究の結果でも，志賀が指摘するような，思春期特有の孫と祖母との関係性が反映されたものと推測できる．つまり，青年期の子にとって，一世代離れた祖母とのコミュニケーションが，子の精神的健康度の高さに影響を与える可能性が示唆されたといえよう．県外の核家族について，このような傾向が示されなかった理由として，物理的距離による交流の少なさが影響すると推測される．特に，都会に住む核家族で，かつ，祖父母が遠方の地方に居住する場合には，祖父母との交流は，殆どないという場合も少なくない．そのような場合には，祖父母と孫とのコミュニケーションは格段に少なくなるため，子の主観的幸福感との関連も示されなかったのではないか．

次に，母親の主観的幸福感の高さは，夫のコミュニケーションと関連していることが明らかとなった．夫婦間のポジティブなコミュニケーションと夫婦関係満足度との関連が指摘されており（平山・柏木，2004；赤澤・伊月・金井，2005），夫婦関係満足度と主観的幸福感との間にも関連が示されている（伊藤・相良・池田,2006）．本研究において，夫婦のコミュニケーション，夫婦関係満足度，及び主観的幸福感が相互に密接に関連していることが示唆された．また，県内の核家族の母親を除くと，母親世代の主観的幸福感と姑のポジティブなコミュニケーションとの間にも関連が示されていた．昔から，嫁姑問題というのは，巷間よく囁かれる問題である．最近では，核家族の割合も増加し，家父長制は今や過去の産物と考えられているとはいえ，未だ多くの女性が夫方の姓を名乗り，夫の家に嫁ぐと形式が一般的である．そのため，母親世代には，夫方の家と良好な関係を構築することは，妻の課題として捉えられる部分もあると推測される．本研究において示された，母親世代の主観的幸福感と姑のコミュニケーションとの関連は，このような現状の反映と考えられる．一方，母親世代の実母のポジティブなコミュニケーションについても，県外の三世代家族の母親を除くと，主観的幸福感との関連が示されている．核家族に関しては，姑より実母との交流が多いことは容易に予測できるが，県内の三世代家族の母親においても同様の結果が示されているのは興味深い．これについては，物理的距離の近さによるものか，あるいは，実母の子育てサポートの高さによるものなのか等について，今後その他の要因も含めて検討する必要性がある．

さらに，祖母の主観的幸福感の高さは，嫁や孫のポジティブなコミュニケーションと関連していた．杉井ら（1994）によると，祖父母の「有用感」は，孫から懐かれ，必要とされることによって高められ，また「生活満足感」も同様に増すことが明らかとなっている．そして，同研究では，孫のことについて，親と意見が合うと認知している祖父母ほど，有用感が高くなることも報告されている．今回の結果も，これを支持するものといえよう．ところで，今回県外の祖母世代では，孫より嫁のコミュニケーションとの関連が強いが，県内では逆であった．これは，県内の三世代家族においては，特に祖父母の孫育てが一般的であることが影響したものと推測される．

以上，本研究では，まず，祖母，母親，子どもの三世代に注目し，各々が認知する家族との直接的かつ質的コミュニケーションについて検討した．その結果，家族内のコミュニケーションにおいては，特に子世代や母親世代が認知する，父方祖母や母方祖母のコミュニケーションについて家族形態による差が顕著に見られることが明らかとなった．父方祖母については，同居の有無がコミュニケーションに影響していると考えられる．しかし，祖父母の同居の有無が孫の自尊心に及ぼす影響を検討した葛西・永尾（2004）によると，同居の有無より，むしろ同居がもたらす関係性の影響が大きいという指摘もあることから，今後は関係性も考慮に入れた検討を行う必要があろう．また，家族構成員間のコミュニケーションの認知間の関係について検討した結果，全体的には対称性が示された．しかし，当然ながら，同一人物に対する評価であっても，評価する者が異なると，その認知間にはずれが生じる場合もあった．今後はこのずれにも注目して，さらに家族の関係性について検討していきたい．さらに，本研究では，個人が認知する家族とのコミュニケーションと，個人の主観的幸福感との関係について検討した結果，祖母－孫，姑－嫁という世代間の相互作用のあり方が，個人の主観的幸福感に影響している可能性が示唆された．コミュニケーションは相互の関係性に影響するだけでなく，個々の精神的な健康度にも影響するものと推測される．

引用文献

赤澤淳子・伊月知子・金井令子．(2005)．夫婦関係満足度とコミュニケーション態度．第16回日本社会心理学会発表論文集，362-363.

Diener, E., Emmons, R.A., Larsen, & Grriffin, S. (1985). The satisfaction with life scale, *Journal of Personality Assessment*, **49**, 71-75.

福田佳織．(2007)．幼児の発話に対する家族成員の応答と幼児のポジティブ情動との関連　－食事場面に注目して　家族心理学研究，**21**(2)，118-133.

福井県総務部政策統計室．(2007)．平成19年版福井県勢要覧

Gottman, J.M.(1993). A theory of marital dissolution and stability. *Journal of Family Psychology*, **7**(1), 57-75.

平井滋野・岡本祐子．(2001)．食事中の会話からみる家族内コミュニケーションと家族の健康性および心理的結合性の関連の検討　家族心理学研究，**15**(2)，125-139.

平木典子．(1998)．家族との心理臨床　垣内出版

平山順子・柏木惠子．(2001)．中年期夫婦のコミュニケーション態度－夫と妻は異なるのか？　発達心理学研究，**12**，216-227.

平山順子・柏木惠子．(2004)．中年期夫婦のコミュニケーション・パターン－夫婦の経済生活及び結婚観との関連　発達心理学研究，**15**，89-100.

伊藤裕子・相良順子・池田政子．(2006)．職業生活が中年期夫婦の関係満足度と主観的幸福感に及ぼす影響　発達心理学研究，**17**，62-72.

Jacobson, N.S., & Moore, D. (1981). Spouses as observers of events in their relationship. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **49**, 269-277.

角野善司．(1994)．人生に対する満足尺度(the Satisfaction with Life Scale(SWLS)) 日本版作成の試み，日本教育心理学会第36回総会発表論文集，192.

神原文子．(1992)．夫および妻の夫婦関係満足度を規定するもの．愛知県立大学文学部論集　社会福祉学科編, **41**, 37-66.

葛西真記子・永尾修一．(2004)．中学生の自尊感情・規範意識と親子関係との関連性　鳴門教育大学学校教育実践センター紀要，**19**，25-34.

小西史子・黒川衣代．(2001)．子どもの食生活と健康状態の日中比較　小児保健研究，**60**(6)，739-748.

眞榮城和美・菅原ますみ・酒井厚・川島亜紀子．(2008)．親子コミュニケーション分析と子どもの自己知覚との関連　日本教育心理学会第50回総会論文集，103.

中釜洋子．(2008)．変化する社会の中の家族　平木典子・中釜洋子　家族の心理サイエンス社　94.

野口修司・若島孔文．(2007)．青年期の親子関係における社会的勢力とコミュニケーションに関する研究　家族心理学研究，**21**(2)，95-105.

小澤千穂子．(1987)．共働き夫婦における結婚満足度．家族関係学：日本家政学会家族関係学部会報，**6**，1-6.

清水美知子．(1997)．祖父母・孫コミュニケーションの研究　関西女学院短期大学研究紀要，**11**，103-116.

佐藤宏治・佐々木久長．(2007)．児童からみた「母親の父親観」と「父親イメージや態度」－20年前との比較　秋田大学医学部保健学科紀要，**15**(1)，28-35.

志賀令明．(2004)．親子孫－多世代間の心理　岡堂哲雄編　家族心理学入門　培風館　69-86.

袖井孝子．(1984)．老年期の夫婦関係．老年社会科学臨時増刊，115-129.

杉井潤子・泊祐子・堀智晴・早川淳・又賀淳．(1994)．祖父母・孫関係に関する研究－第３報　大阪市立大学

生活科学部紀要, 42, 141-153.
渡邉タミ子・鈴木奈緒・長嶋純子・横森愛子・茂手木明美・比江島欣慎. (2001). 父親の育児協力・夫婦の対話と母親の育児満足度との関連性. 山梨医科大学紀要, 18, 47-53.

付記

本稿は, 平成19年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号19530602「研究課題名：家族システムの発達・変容に世代間の相互作用が及ぼす影響」）ならびに平成20年度仁愛大学学内共同研究費の研究成果の一部である.